

はじめに

本書は、初版以来、学習・受験の好伴侶ほんりょうとして高校生諸君に愛用されてきた『要説 大鏡・増鏡』を全面的に改めたもので、新版の特色は次の諸点である。

- ① 判型・文字の大型化 読みやすくするために、大判（A5判）に改め、文字を大きくした。
- ② 2色刷りの採用 学習上の重要箇所などが視覚的に区別できるようにした。
- ③ 教科書の本文 現在使用されている主要教科書に収録された章段を増補するとともに、必読の文章を網羅するよう努めた。
- ④ 教科書の設問 教科書の研究課題・設問の解答・解法を、「語釈と文法」「重要語」「文法の要点」「研究」などの欄に、可能な限り収録した。

凡 例

一、本文は、『大鏡』は「日本古典文学全集」本、『増鏡』は「日本古典文学大系」本によった。ただし、他の良書の本文を参考にして、一部改めたところもある。また、本文を読みやすくするために、句読点・引用符号・漢字・かなづかいを適宜改め、また、できるだけ多く読みがなをつけるとともに、旧かなづかいの部分の左傍には、かたかなで読み方を示した。

二、解説は、その章の内容を簡潔にまとめたものであるが、必要に応じて、解釈・鑑賞の手引きとなるようなことからも加えた。

三、口訳は、原文に即してわかりやすい訳文を作ることにつとめた。原文がなく訳文に補った箇所には、()をつけて明示し、原文と訳文を比較対照する際の便をはかった。

四、読解の要点には、原文を読み解くうえのヒント・手引きになるような語句・語法・文脈上の要点を解説した。古文の実力をつけるには、いきなり訳文を読むのではなく、できるだけ自分の力で考えてみるのがたいせつである。それゆえ、この「読解の要点」を手がかりとして実力を養成されることを切望する。

五、語釈と文法は、平易なことばで、しかしできるだけ詳しく説くことを心がけた。抽出した語句には、必要があればまず「」の欄内に品詞名を示して、次に語義を説いた。重要語や、一語で多くの意味を持つ語については、そのすべての意味・用法をあげて古文解釈の基礎知識が身につくよう心がけた。また、特に重要な語句は大きな文字にして、で囲み、注意をうながしてある。

六、重要語・文法の要点では、解釈上とくに注意しなければならない語句や、文法的に検討しておかなければならないような語句をとりあげて説明した。また、文法的な基礎事項や、広く応用のきく事項のまとめはこの欄で扱い、十分な解説を加えることにした。

七、右の五・六の説明にあたっては、重要語参照 文法参照 等の指示をして、相互の関連をはかり、できるだけ学習上の便宜をはかるよう意を用いた。

八、鑑賞の欄を、重要な章ごとに設け、文学作品としての味わい方を深めるようにした。鑑賞は、特に原文に即して具体的に述べるよう心がけるとともに、作品の背景として重要な事項をも詳しく説いた。

九、研究問題とその解答を、重要な章に添えた。問題は入試問題中から厳選するとともに、新作問題をも加えたが、これによって各自の実力をテストされたい。

本書の作成に当たっては、永橋 博先生に多大のご尽力をいただきました。

目次

解説 …………… 八

大鏡

1 序文

- 【一】さいつころ、雲林院の菩提講にまうでて……………三
 - 【二】今ひとりの翁、「いくつといふこと、……………三三
 - 【三】たれも少しよろしきものどもは、……………六
 - 【四】今ひとりに、「なほ、わ翁の年こそ……………三三
 - 【五】「さてもうれしく対面したるかな。……………三三
 - 【六】かくて講師待つほどに、われも人も……………三三
 - 【七】世継がいふやう、「世はいかに興ある……………三三
 - 【八】「まめやかに世継が申さむと思ふことは……………三三
 - 【九】「世の中の、摂政・関白と申し、……………三三
- 2 花山天皇紀
- 【一】次の帝、花山院天皇と申しき。冷泉院の……………三

- 【二】あはれなることは、おりおはしましける……………三三
- 【三】さて土御門より東さまにゐて出だし……………三三
- 【四】花山寺におはしましつきて、……………三三

3 基経伝

小松のみかどの御母、この大臣の御母、……………三三

4 時平伝

- 【一】「このおとどは基経のおとどの太郎なり。……………三三
 - 【二】このおとど子どもあまたおはせしに、……………三三
 - 【三】なきことによりかく罪せられたまふを……………三三
 - 【四】かくて筑紫におはしつきて、……………三三
 - 【五】「筑紫におはします所の御門かためて……………三三
 - 【六】「このことども、ただちりぢりなるにも……………三三
 - 【七】「また、雨のふる日、うちながめ……………三三
 - 【八】「あさましき悪事を申し行ひたまへりし……………三三
- 5 実頼伝
- 敦敏の少将の子なり、佐理の大式、世の……………三三

6 頼忠伝

【一】この大納言殿、無心のこと一度ぞ……………二六

【二】ひととせ、入道殿の、大井川に……………二三

7 師尹伝

【一】三条院のおはしましける限りこそあれ、……………二七

【二】「いと近く、こち。」と仰せられて、……………二八

【三】御子どもの殿ばら、また、例も御供に……………二四

8 師輔伝

【一】藤壺・弘徽殿との上の御局は、……………二五

【二】この当代や東宮などの、まだ宮たちにて……………二六

9 伊尹伝

【一】男君達は、代明の親王の御むすめの……………二七

【二】この大納言殿、よろづにととのひ……………二七

【三】少しいたらぬことにも御たましひの……………二七

【四】一条摂政殿の御男子、花山院の御時、……………二七

【五】この花山院は、風流者にさへおはしまし……………二六

10 兼通伝

「堀河殿、果ては、我失せたまはむとては、……………二七

11 道隆伝

【一】入道殿御岳にまゐらせたまへりし道にて、……………二〇

【二】この帥殿の御一つ腹の、十七にて……………二〇七

【三】この中納言は、かやうにえさりがたき……………二二

【四】御目のそこなはれたまひにしこそ、……………二七

12 道長伝

【一】このおとどは法興院のおとどの御五男、……………二四

【二】四条の大納言の、かく何事もすぐれ、……………二五

【三】さるべき人は、とうより御心だましひの……………二六

【四】「子四つ」と奏してかく仰せられ議する……………二四

【五】世間のひかりにておはします殿の、……………二六

【六】帥殿の、南の院にて人々集めて……………二四

【七】また、故女院の御石山詣に、この殿は……………二四

【八】三月巳の日の祓に、やがて逍遙したまふ……………二九

【九】女院は、入道殿をとりわき奉らせ……………二五

【一〇】されば、上の御局に上らせたまひて、……………二五

【一一】中の関白殿・粟田殿うちつづきうせさせ……………二六

13 藤原氏物語

供養の日の有様のめでたさは、……………二六

14 昔物語

【一】公忠の弁をば、大方の世にとりても……………二七

【二】「村上の帝はた申すべきならず。……………二七

【三】延喜の御時に、古今抄せられしをり、……………二六

増鏡

1 序文

きならぎの中の五日は、鶴の林に薪つきにし……………二九

2 おどろの下

【一】法皇かくれさせたまひにし後は、……………二四

【二】鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひ……………二六

【一】上のその道を得給へれば、下も……………二〇

3 新島守

【一】このおはします所は、人離れ里遠き島の……………二六

【二】初秋風のたちて、世の中いとど……………二八

4 久米のさう山

【一】出雲の国安来の津といふ所より御船に……………二三

【二】海づらよりは少し入りたる国分寺といふ……………二五

付録

京都付近地図……………二九

語句索引……………三〇

安 徳	後鳥羽	土御門	順 徳	仲 恭
治承四年 四年	文治元年 建久三年 建久三年 建仁二年	建久三年 九年 建仁二年	承久元年 三年	承久元年 三年
二〇七	二八〇	二五二 二九 二〇二	三三九 三三	三三九 三三
源頼朝挙兵。後鳥羽帝誕生。 増鏡の記事ここに起筆。	平氏は安德帝を奉じ西海には しる 平氏滅亡、安德院崩（院政― 後白河）	頼朝開幕、後白河院崩 後鳥羽帝讓位、土御門帝即位 千五百番歌合成る（院政―後 鳥羽）	源実朝薨（院政―後鳥羽） 承久の乱 、北条泰時京都に乱 入、後鳥羽院隠岐遷幸、順徳 院佐渡遷幸、土御門院土佐遷 幸（院政―後鳥羽）	元久詩歌合・新古今和歌集成 る

四 条	後宇多 花 園 後醍醐	建武元年	嘉禎二年 弘安四年 正和五年 正中元年	二二六 二八二 三〇六 二二四	後鳥羽院遠島御歌合成る（院 政―後堀河） 弘安の役（院政―龜山） 北条高時執権（院政―伏見） 後宇多院崩、日野資朝・日野 俊基六波羅に捕えられる（正 中の変） 元弘の乱 、後醍醐帝笠置山遷 幸、楠木正成挙兵、笠置山陥 落、帝還幸（光厳院踐祚） 後醍醐帝隠岐に配流、尊良親 王は土佐、宗良親王は讃岐へ 流される、源具行斬られる、 日野資朝斬られる 後醍醐帝隠岐を脱出伯耆に着 御、足利高氏六波羅を討つ、 新田義貞挙兵、 北条氏滅亡 、 帝は京都遷幸、大塔宮その他 公卿帰洛還俗、 増鏡の記事こ こにおわる 後醍醐帝ご親政（建武の新政）
-----	-------------------	------	------------------------------	--------------------------	---

大 鏡

1 序 文

解説 文徳天皇から十四代、百七十六年間の事跡は、雲林院の菩提講で奇しくもめぐり合った、大宅世継・夏山繁樹という百数十歳の超老人の懐旧談という形で述べられていく。語られる舞台の設定――語り手の経歴――老人の昔がたりの意義と述べつつけて、その後、自分の語ろうとするのは入道道長公の栄えあそばす有様であり、それを言うたためにおのずから多くの天皇・皇后・大臣方のことを申しあげるようになる。本書の述作の目的や構想などを明らかにしている。

【一】 さいつころ、雲林院の菩提講にまうでてはべりしかば、例の人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁ふたり、おうなといきあひて、同じ所にあぬめり。あはれに同じやうなるものさまかなと見はべりに、これらうち笑ひ見かはしていふやう、「年ごろ昔の人に対面して、いかで世の中の見聞く事どもをきこえあはせむ、このただ今の入道殿下の御有様をも申しあはせばやと思ふに、あはれにうれしくも会ひ

口訳 先ごろ、わたくし（作者）が雲林院の菩提講に参詣いたしましたところ、普通の人よりは格別に年老い、異様な感じのする爺さん二人と、婆さん（一人）とが来合わせて、同じ場所にすわっていたようだった。ほんとにまあ、（三人とも）そろいもそろって同じような老人たちだなあと《思つて》見ておりましたところ、この老人たちはたがいに笑いながら顔を見合せて、《さて、そのうちの一人（大宅の世継）が》言うことには、「《わたしは》以前からずうっと、昔なじみに会つて、何とかして世の中の間まで見たり聞いたりしてきたいろいろな出来事をお互いにお話し合ひ申したいものだ、《また》例の、現在の入道殿下（藤原道長）の御有様などお互いに話し合ひ申したいものだと思つていましたところ、実にうれしいことにも

申したるかな。今ぞ心やすくよみぢもまかるべき。おぼしき事はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける。かかればこそ、昔の人はものいはまほしくなれば、穴を掘りてはいひ入れはべりけめとおぼえはべる。かへすがへすうれしく対面したるかな。さても、いくつにかなりたまひぬる。」といへば、

《こうして》お会い申ししたものですなあ。《もうこれで年ごろの願いもかないましたので》今こそ心残りなくあの世へ行くこともきつとできるでしょう。言いたいと思うことを言わずにいるのは、《諺》にもあるように、《ほんとうに何かが腹の中にものがたまっている》《ような、いやな》気持ちがあるものですなあ。それですから古人は、何か言いたくなると、穴を掘って《その中に》言い入れたのだからと思われます。《ともあれ》お会いできたことはくれぐれも嬉しいことですなあ。それにしても、《あなたは、いったい》いくつにおなりなさいましたか。《と》言うと、

読解の要点 菩提講に参詣した人々の中の、ある老人がもう一人の老人に話しかけているという場面がつかめれば、文の筋はわりあいにつかみやすい。大鏡の作者は、この老人たちの対話の記録者という立場に立っているのである。また、解釈の点では、敬語とくに謙讓語と丁寧語は、「まうで・はべり・きこえあはせ・申しあはせ・申し・まかる」などと連続的に出てくるから、これらの意味・用法を正しくつかむようにつとめる。また、後半には係り結びになっているものが多い。これも文法の基礎として追求しておこう。

語釈と文法

◆さいつころ―「先つころ」のイ音便。「つ」は

地図参照。その後荒れはてて、観音堂だけ現存。

か(過・已)・ば(接助)―「まうづ」は尊い所へ行くという意の謙讓語で、到着点の寺に対する敬意。**文法参照** 「はべり」は丁寧語で、口語の「ます」に当たる。聞き手に対する敬意。「しかば」は「已然形十ば」の形で、ここは偶然な事件の前提。「……したころ」の意。

「の」の意の古い格助詞。用法が固定化しているので、平安時代以後は全部で一語の名詞とみてよい。類例「天つ風」・「沖つ白波」。

◆菩提講―極楽往生を求めするために法華経を講ずる法会。雲林院の菩提講は五月に行われたという。

◆例の人―普通の人。「いつも参会する

◆雲林院―京都市北区紫野の大徳寺の東南にあった、天台宗の寺。三一九ページの

て(接助)・はべり(ラ変(補)・用)・し

「……したころ」の意。

人」の意ではない。

昔の人

昔の知り合い。この二人の翁は、つづく文でわかるように昔なじみであった。もちろん「古人」の意もあり、六行あとの場合はその意である。

対面

「たいめん」の「ん」を略した表「うんりんあん」の略で、はなはだしくは、「うりあん」または「うりあん」とも読むことがある。

いかで

副詞で、希望・疑問・反語などの意がある。ここは下の「む」・「ば」と呼応して希望(何とかして・どうにかして……よう(たい)の意。**文法参照** ◆きこえあはせむ(きこえあはせ(サ下二・末)・む(希・終)―「きこゆ」は「言う」の意の謙讓語。したがって「あはず」と複合した場合にも、謙讓の意をもつ。つぎの「申しあはせ」の「申す」も「言う」の意の謙讓語だから、まったく同じ形となる。なお、「ばや」は自己の希望を表す終助詞。

入道殿下

藤原道長。「入道」は仏門に入った人であるが、とくに三位以上の人についていうことが多く、それ以下の人には「発意・道心」などを用いる。「殿下」は皇族・摂政・関白などの敬称。

◆会ひ申したるかな―この「申し」は動詞についている場合だから謙讓の補助動詞。前の「申しあはせ」の「申し」の場合とちがう点に注意。

よみぢ

「よみぢ」冥土へ行く道。

まかるべき

「まかる(ラ四・終)・べき(可・体)」「ぞ」の結び(―「まかる」は元来尊い所から卑しい所へ退出する意の謙讓語だが、ここは「行く」という自分の動作を丁寧になんげに言う用法。丁寧語とみてよい。**文法参照** ◆おほしき―ここは「……したいと思う」の意で、シク活用の形容詞の連体形。動詞の「おぼす」・「おぼゆ」などと混同しないこと。

げに

「昔からいわれている・古歌にもある・世間でも言っている」が、ほんにそのとおり、と賛成・同意を示す語。「美に・たいそう」などと訳してはいけない。このことばによって、「おぼしき事いはぬは腹ふくるる心地す」ということばが、当時すでにことわざになっていたことがわかる。

腹ふくるる心地

「しける」の主語。「腹(名)・ふくるる(ラ下二・体)「

◆ぬめり(ぬ(ワ上二・用)・ぬ(元)強め)・終)・めり(婉・終)―「ぬる」は、すわるの意。「ぬり」は現在視界内の推量(「どうやら……の様子だ」・「自分には……のように思われる」の意)。この語によって、大鏡の記録者からやや離れた所に語り手の老人たちがいたことがわかる。

あはれに

形動の連用形。感動詞ふうの用法。すぐ後の「あはれに」の場合、「うれしく」と並列の形で、「会ひ申したる」ことに對する感想を表す用法。三六ページ参照。

◆ものさま―「もの」は、ばくぜんとした対象を示すだけの意味をもつ。類例「ものあはれ」。

◆年ごろ―数年来。転じて「平生」の意にも用いられる。類例「月ごろ」・「日ごろ」。

あはれに

形動の連用形。感動詞ふうの用法。すぐ後の「あはれに」の場合、「うれしく」と並列の形で、「会ひ申したる」ことに對する感想を表す用法。三六ページ参照。

◆ものさま―「もの」は、ばくぜんとした対象を示すだけの意味をもつ。類例「ものあはれ」。

◆年ごろ―数年来。転じて「平生」の意にも用いられる。類例「月ごろ」・「日ごろ」。